



【住 所】大阪市天王寺区烏ヶ辻 2-6-40

【病院長】五十嵐 敢 先生

【病床数】389床

【スタッフ】医師8名(日本消化器内視鏡学会認定指導医 4名、専門医 4名)、
看護師(消化器内視鏡技師会認定技師) 5名、補助2名、事務2名

【内視鏡検査・治療総数】(平成18年度) 9,773件(うち、上部内視鏡検査 6,741件、大腸内視鏡検査 1,886件、胆膵内視鏡検査・治療 123件、上部内視鏡治療 99件、大腸内視鏡治療 475件、小腸内視鏡 109件、超音波内視鏡 147件、気管支鏡 193件)

【内視鏡関連機器】内視鏡光源 7台(うち、特殊光内視鏡用 3台)、スコープ47本(うち、上部検査用 19本、経鼻 1本、上部処置用 1本、下部検査用 12本、気管支用 6本、胆膵用 6本、小腸用 2本)、超音波関連機器 3台、アルゴンプラズマ凝固装置 1台、高周波凝固装置 3台、ファイリングシステム 1式

スタッフ間の連携と高い専門性が 安全で快適な医療サービスの提供を実現

● 快適な内視鏡検査を目指して改装された 新しい内視鏡センターがオープン

NTT西日本大阪病院は、企業の職域病院としてだけでなく、地域社会に密着した中核病院として発展してきました。一般の市中病院でありながら大学病院に匹敵する設備と人材を備え、高度先進医療を地域に提供する役割を担っています。また同院は、臨床研修病院であるとともに各種学会の認定医・専門医の認定教育施設でもあるため、将来の医療を担う人材を数多く輩出するという使命も果たしています。

同院の内視鏡センターは、より患者様本位の内視鏡検査と治療を提供するため、平成19年5月に大規模な改装を行って新しくスタートしました。内視鏡センター全体のレイアウトは、患者様と医療側の導線が交わらないように設計され、出入口も別々に配置されています。それまでカーテンで仕切っていた6台の検査ベッドと、術後に検査内容を説明するための診察室については、患者様のプライバシーを確保するために全て個室化されました。また、検査後には患者様にゆっくり休んでいただくようリカバリールームも完備されています。

● 診療科の枠を超えた連携体制で 迅速で的確な内視鏡診療を実践

同センターでは年々増加する内視鏡検査と治療に対応するため、月曜から金曜までの週5日間、上部と下部ともに毎日内視鏡検査を実施しています。消化器疾患については消化器内科と消化器外科が共同で検査や治療にあたり、検査時に内科医と外科医がその場でコンセンサスを取り、後の治療戦略を一緒に策定しているというのが大きな特徴です。これにより、診療側が患者様のニーズに合致したスピーディな検査や治療を提供することが可能となっています。5名の看護師も全て内視鏡技師の資格を所得しており、高度な技術と知識を有したチーム医療として、患者様一人ひとりに対してより質の高い診療を提供すべく日々力を注いでいます。

同センターでは経鼻内視鏡、超音波内視鏡、小腸内視鏡、カプセル内視鏡等をいち早く導入し、最先端の治療や検査を実施していることから、国内だけでなく海外からも手技習得のために多くの医師が見学に訪れています。中でも小腸内視鏡を導入してからは、一般的に少ないとされてきた小腸疾患が種々認められることから、この検査の有用性が認識され紹介患者が増加しているそうです。新たな診断法として注目されている特殊光内視鏡検査も開始しており、現在では症例の集積と解析に力を入れているそうです。また、胆道結石症例などにおいてはIDUSを積極的に併用し、遺残結石がないかを確実に確認することで再発予防につとめるなど、より安全で確実な治療を実践しています。

適切な環境整備と総合的な人材育成が 安全で確実な医療サービスの提供に繋がる

同センターでは、医療の基本である安全への配慮を特に重要な要素とし、この理念を環境整備と人材育成の根幹としています。まず、安全な医療環境を整備するために、同センターでは感染管理に特に力を入れています。スコープの再生については、消化器内視鏡学会が定めるガイドラインを遵守して全例で洗浄・消毒を実施しており、また術者や介助者の職業感染防止のためにもマスクやガウンの着用等の防護対策も徹底しています。さらに、内視鏡処置具についてはほとんどの製品をディスポーザブル化しています。内科部長の石橋一伸先生は、「処置具のディスポーザブル化は、感染対策のためだけでなく、常に一定の性能を確保した製品であるため安心して手技を行えるという利点が挙げられると思います。近年、内視鏡下で行う治療手技は高度化し、また合併症などの危険を伴うものも多くなってきました。そのため、再生品を使って処置具が正しく機能しなかった場合を考慮すると、ディスポーザブル製品の使用は術者や介助者が安心して手技に集中できる環境を提供するという意味でも重要です」とお話しになり、ディスポーザブル製品の使用がより安全な手技の実践に繋がることを強調されました。

人材育成については、近隣の大学病院と連携してカリキュラムを策定し、最新の機器と経験豊富なスタッフの下で安心して技術習得に努められるよう考慮されて行われています。副院長の久保光彦先生は、「少子高齢化が進む現在では、専門医であってもあらゆる分野における総合的なプライマリ・ケアの対応能力が求められています。そのため当院でも、3年目まではなるべく内科医として総合的な知識を身に付けてもらい、それ以降に消化器内科医としての専門知識を習得するようにしています。適切な指導体制の下で医師としての基礎体力を強化することが、日常診療で頻繁に遭遇する様々な病気や病態に適切に対応し、安全で確実な診療を実践することに繋がると考えます」とご説明いただきました。また、各種学会への参加や発表を奨励しており、研修医には最低で年に1回の学会発表を、また後期研修医に対しては総会での発表を義務付け、若手医師の興味とやる気を引き出すよう工夫しているとのことでした。



副院長 久保光彦先生



内視鏡センターのみなさん（前列向かって右から2番目が石橋一伸先生）